

学級活動の一連の学習過程における評価の充実と指導の改善

—自己を生かし、協働してよりよい学級・学校生活をつくる児童生徒の育成を目指して—
特別活動研究会議

青木 洋俊¹

田中 潤也²

飯野 大輝³

小田 節子⁴

要 約

令和2年3月26日、国立教育政策研究所から『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料「特別活動」（以下「参考資料」）が示された。キャリア教育の要として位置付けられている特別活動において、「児童生徒のよさや可能性を多面的・総合的に評価するとともに、確実に資質・能力が育成されるよう指導の改善に生かす」ことが求められている。

「学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」では、特別活動で育成を目指す資質・能力の視点として「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」が示されている。研究員の学級の実態調査から、各学級における課題について検討し、それぞれに焦点化する視点を見いだした。この三つの視点を児童生徒の具体的な姿として表すと、「自己を生かし、協働してよりよい学級・学校生活をつくる」姿であるととらえた。この姿の実現のためには、学級活動の内容に即して、「指導と評価の一体化」を図ることが重要である。

そこで本研究では、「参考資料」の趣旨を踏まえ、「指導と評価の一体化」を図り、児童生徒の資質・能力の向上のために、学級活動における評価の充実と指導の改善を目指すことを研究の目的とした。

研究の方法として、まず、特別活動の評価の在り方についての基礎研究を行った。「解説」の記述から、特別活動の評価に必要な13の視点を見だし、さらに特別活動の評価のための3要素を明らかにした。そしてこの3要素から、本研究における手立てを設定した。第1に「発達の段階に即した活動形態別の『目指す児童生徒の姿』一覧」（以下「一覧」）を作成し、児童生徒のよさや可能性を多面的・総合的に評価できるようにした。また、それと関連付ける「指導と評価の一体化 重点化シート」を作成し、児童生徒の実態に合わせて、評価する観点や目指す姿を明確にできるようにした。第2に、「児童生徒見取りシート」を作成し、形成的評価の記録を蓄積できるようにした。第3に「キャリア・パスポート」を活用した活動を取り入れ、児童生徒が「実生活の自己調整」を行えるようにした。

こうした手立てをもとに、目指す児童生徒の姿を明確にしたうえで学級活動の実践を行い、一連の学習過程の中で児童生徒のよさや可能性を多面的・総合的に見取り、フィードバックする形成的アセスメントを行うことを通して、指導の改善を目指した。

成果として、特別活動で育成を目指す資質・能力の視点である「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」につながる姿が見られるようになった。特に「一覧」と「重点化シート」の活用は、学級活動において、教師が指導に当たる際の指針として有効であった。

キーワード：特別活動、学級活動、指導と評価の一体化、人間関係形成、社会参画、自己実現

目 次

I 主題設定の理由	14	3 研究の方法	21
1 研究の目的	14	4 検証授業の実際	24
2 平成29年改訂における特別活動の位置付け	14	III 研究のまとめ	31
3 川崎市における特別活動の現状	16	1 成果について	31
4 主題設定	17	2 課題について	31
II 研究の内容	18	参考文献	32
1 研究の構想	18	指導助言者	32
2 特別活動の評価	18		

¹川崎市立上作延小学校総括教諭（長期研究員）

²川崎市立下河原小学校教諭（研究員）

³川崎市立平間中学校教諭（研究員）

⁴川崎市立西中原中学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 研究の目的

令和2年度、平成29年改訂の学習指導要領が小学校で全面実施された。令和3年度には、中学校で全面実施となる。そうした中、令和2年3月26日に、『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（特別活動）（以下「参考資料」¹という。）が国立教育政策研究所から示された。そこには、「児童生徒のよさや可能性を多面的・総合的に評価するとともに、確実に資質・能力が育成されるよう指導の改善に生かすことが求められる」²とある。本研究会議では、「参考資料」で示された特別活動における評価の手立てを更に工夫改善して「指導と評価の一体化」を図り、児童生徒の資質・能力の向上のために、川崎市における学級活動の評価の充実と指導の改善を目指すことを研究の目的とした。

2 平成29年改訂における特別活動の位置付け

(1) キャリア教育の要としての特別活動

学習指導要領第1章総則第4の1の(3)において、「児童（生徒）が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科等の特質に応じた、キャリア教育の充実を図ること」³と新たに示された。総則で特別活動がキャリア教育の要として位置付けられた点は特筆すべきことである。

学習指導要領における特別活動の目標（図1）は、当然のことながら、総則の趣旨を踏まえて設定されている。本市における「キャリア在り方生き方教育」⁴の推進のためにも、キャリア教育の要としての特別活動を更に充実させていく必要がある。

特別活動の目標 集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。 (1)多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。 (2)集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。 (3)自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の（人間としての）生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。
--

図1 特別活動の目標（平成29年改訂）（ ）は、中学校 筆者加筆

(2) 特別活動で育成を目指す資質・能力

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」（以下、「解説（小学校）」という。）及び、「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」（以下「解説（中学校）」という）⁵において、特別活動で育成を目指す資質・能力の視点として、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」が示された。これは、中央教育審議会教育課程部会特別活動ワーキンググループ（2016）が「特別活動において育成すべき資質・能力の視点について（案）」（図2）で示したものがもとになっている。杉田（2020）は、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の定義を著書⁶の中で述べている（表1）。杉田はこれらを「人間としての生

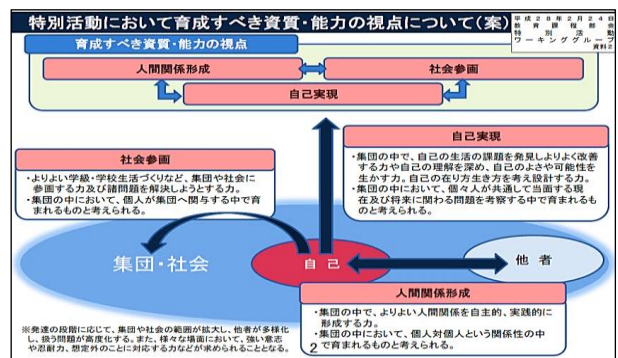


図2 特別活動において育成すべき資質・能力の視点（平成26年 特別活動WG 資料より）

¹ 「参考資料」と示した場合、特別活動の「参考資料（小学校）」「参考資料（中学校特）」双方を表すこととする。

² 国立教育政策研究所『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（特別活動） 東洋館出版社 2020年 p. 12

³ 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』 2017年 p. 24（『中学校学習指導要領（平成29年告示）』 p. 25）

⁴ 第2次川崎市教育振興基本計画「かわさき教育プラン」第2期実施計画（平成30年3月）で、基本政策I施策1に位置付けられた本市のキャリア教育。

⁵ 「解説」と示した際には、「解説（小学校）」「解説（中学校）」の2冊を示すこととする。

⁶ 杉田洋・稲垣孝章『特別活動で、日本の教育が変わる！』小学館 2020年 pp. 38-39

き方の三原則」と述べている。本研究会議においても、この定義を採用する。

なお、この三つの視点は、川崎市総合教育センター実践研究主題である「自己実現を図り、持続可能な社会を創る資質・能力の育成」とも重なるものであると考える。

(3) 学級活動の内容と一連の学習過程

特別活動は、学級活動、児童会（生徒会）活動、クラブ活動、学校行事で構成される。なお、クラブ活動は、小学校のみで示されている。

学級活動は、学級活動(1)「学級や学校における生活づくりへの参画」と、学級活動(2)「日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」並びに学級活動(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」の三つの内容が示されている。学級活動(3)は、今回の改訂において、小学校では、これまでの学級活動(2)から分かれるかたちでキャリア形成や自己実現に関わる内容として新設され、小学校から高等学校までの一貫性が明確になった。

学級活動(1)は、「学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践」⁷することを内容とする。学級活動(2)及び(3)は、(2)が現在の生活上の課題、(3)が現在及び将来を見通した生活や学習に関する課題という違いはあるが、「学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践」⁸することを内容とする。

今回の改訂では、図3及び図4のように、「解説」で学級活動における学習過程が例示された。これにより、小学校と中学校とで同様の学習過程で学級活動を行っていくことが、明確になったといえる。そうした一連の学習過程の積み重ねの中で児童生徒の資質・能力の育成を図っていくうえでも、目指す児童生徒の姿を明確にして児童生徒を見取り、適切な指導を行っていく必要がある。

(4) 先行研究等から見た特別活動の課題

「特別活動ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて（報告）」⁹では、特別活動に「必ずしもその役割を十分に果たし切れていなかった」面があったことを指摘している。「特別活動に対する指導方法や評価方法の理論的な研究や、実践の共有が都道府県や学校間、さらには教員間において十分になされてこなかった」ことを要因の一つに挙げ、「評価方法の理論的な研究」の必要性が示された。

先行研究においても特別活動の評価に視点を当てた研究論文は極めて少ない。2020年10月に、国立国会図書館で検索したところ、『日本特別活動学会紀要』1号から28号までの約300件の論文中、特別活動の「評価」を表題に明記した論文はわずか6件であった。

表1 杉田洋による三つの視点の定義

人間関係形成	違いや多様性を超え、多様な人々とともに生きること
社会参画	集団や社会の形成者としての役割を果たしながら生きること
自己実現	なりたい自分を目指し、自分らしく生きること

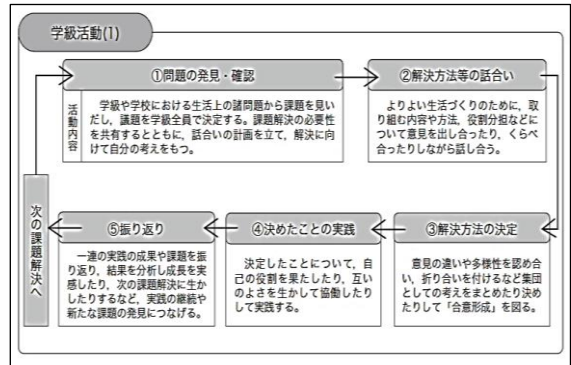


図3 「解説」に例示された学級活動(1)における学習過程

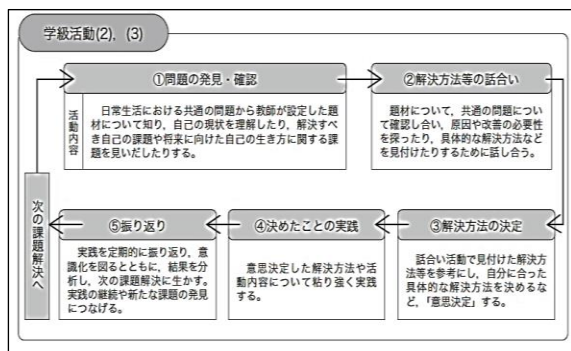


図4 「解説」に例示された学級活動(2)(3)における学習過程

⁷ 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』2017年 p. 43

⁸ 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』2017年 p. 43

⁹ 中央教育審議会教育課程部会「特別活動ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて（報告）」2016年 p. 24

本市の先行研究においても、高橋（2006）は、「評価補助簿などを活用した評価方法についても今後さらに検討する必要がある」¹⁰と述べている。その後、本市において、特別活動の研究論文として評価そのものに焦点を当てたものはない。このことから、本市において、特別活動の指導と評価に焦点を当てた研究の必要性、特に、「指導と評価の一体化」を図った学級活動の研究の必要性が見えてきた。

3 川崎市における特別活動の現状

(1) 全国学力・学習状況調査における質問紙から見た本市の学級活動の実態

「平成31年度全国学力・学習状況調査」の質問紙の結果¹¹から、次のことが見えてきた。

表2は、本市における「学校質問紙」、つまり主として管理職が回答した学級活動に関するアンケート結果である。小学校においては、全国平均並であったが、中学校では、学級活動(1)及び(2)(3)ともに高い結果が出ている。

また、表3は、本市における「児童生徒質問紙」、つまり、児童生徒を対象とした調査の結果である。これを見ると、ほぼ全国平均並みの結果となっているものの、小学校の学級活動(1)については、全国平均よりも高い結果となっている。

つまり、全国的に見れば比較的高い水準にあるといえる。これは、「キャリア在り方生き方教育」を継続していることが要因の一つであると考えられる。より詳細な分析をするために、質的な課題を探るべく、本市のキャリア在り方生き方教育担当者を対象にアンケート調査を5月に実施した。

表2 全国学力・学習状況調査「学校質問紙」の学級活動に関する川崎市の結果（表は、筆者作成）

学級活動(1)					学級活動(2)(3)				
調査対象学年の児童に対して、学級生活をよりよくするために、学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法などを合意形成できるような指導を行っていますか					調査対象学年の児童に対して、学級活動の授業を通して、今、努力すべきことを学級での話し合いを生かして、一人一人の児童が意思決定できるような指導を行っていますか				
小学校					小学校				
	とても思う	わりと思う	あまり思わない	全く思わない		とても思う	わりと思う	あまり思わない	全く思わない
川崎市	40.0	54.8	4.3	0.0	川崎市	33.9	58.3	7.0	0.0
神奈川県	41.0	55.0	3.7	0.0	神奈川県	30.7	60.8	8.3	0.0
全国	40.2	54.3	5.3	0.1	全国	34.9	58.2	6.7	0.0
中学校					中学校				
	とても思う	わりと思う	あまり思わない	全く思わない		とても思う	わりと思う	あまり思わない	全く思わない
川崎市	43.4	54.7	1.9	0.0	川崎市	41.5	54.7	3.8	0.0
神奈川県	35.8	57.5	6.7	0.0	神奈川県	28.2	62.5	9.3	0.0
全国	36.8	56.4	6.6	0.1	全国	31.1	60.3	8.4	0.1

表3 全国学力・学習状況調査「児童生徒質問紙」の学級活動に関する川崎市の結果（表は、筆者作成）

学級活動(1)					学級活動(2)(3)				
あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会(学級活動)で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思いますか。					学級活動における話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいると思いますか。				
小学校					小学校				
	とても思う	わりと思う	あまり思わない	全く思わない		とても思う	わりと思う	あまり思わない	全く思わない
川崎市	35.1	43.6	16.9	4.3	川崎市	28.7	45.8	20.8	4.6
神奈川県	28.8	44.7	20.5	5.8	神奈川県	25.4	44.8	23.8	6.0
全国	30.1	43.9	20.3	5.6	全国	28.8	44.6	21.3	5.2
中学校					中学校				
	とても思う	わりと思う	あまり思わない	全く思わない		とても思う	わりと思う	あまり思わない	全く思わない
川崎市	26.7	48.9	18.4	5.8	川崎市	20.1	45.0	26.1	8.8
神奈川県	21.4	47.5	22.9	8.0	神奈川県	16.2	43.0	30.2	10.5
全国	25.3	46.3	21.3	7.0	全国	21.0	44.6	26.1	8.1

(2) 本研究会議が今年度実施したアンケート調査から見た本市における学級活動の課題

「特別活動について課題に感じていること・知りたいこと」についての自由記述を要約し、分類整理してカテゴリー別に集計したところ(表4)、「学級活動における指導方法の共通理解に関すること」が、全体の44.0%を占めた。その中には、「指導者による実践の格差が生じている(8.3%)」といった回答が見られた。次いで、「学級活動の時間の確保が十分にできていない」といった「時間の確保」についての回答が全体の14.3%、「特別活動で育成を目指す資質・能力」についての回答は11.9%となっている。「特別活動の指導と評価」についての回答は、7.1%であった。

この結果から、本市の学級担任は、学級活動を行う中で指導方法に課題意識をもっていること、評価に関することへの意識は十分ではないことが分かった。「指導と評価の一体化」を図り、特別活動で育成を目指す資質・能力の三つの視点をもとに児童生徒の姿を明確にし、本研究で重視する一連の学習過程に基づいた学級活動において、児童のよさや可能性を適切に評価して指導の改善に生かす必要がある。

¹⁰ 高橋徹「自治的、自発的態度を育む学級活動」平成17年度研究紀要第19号 川崎市総合教育センター p.113

¹¹ 国立教育政策研究所ホームページ (2020年4月27日)

「平成31年度(令和元年度) 全国学力・学習状況調査 指定都市別 調査結果資料」

表4 「特別活動についての課題や知りたいこと」(自由記述)のアンケート結果 (対象：市内小中学校166校 回収145校 回答84校)

「特別活動について課題に感じること・知りたいことなど」自由記述の具体的な内容(要約)			カテゴリー		
自由記述の主な内容	件数	割合	記述内容の分類	件数	割合
① 指導者による実践の格差が生じている	7	8.3%	学級活動の指導方法の共通理解に関すること	37	44.0%
② キャリア・パスポートの活用方法を知りたい	7	8.3%			
③ キャリア・パスポートの意義についての共通理解が必要	4	4.8%			
④ 学級会の進め方の校内の共通理解が必要	4	4.8%			
⑤ キャリア・パスポートの取組に不安がある	3	3.6%			
⑥ 合意形成を目指す話し合い活動の方法を知りたい	3	3.6%			
⑦ 学級活動(3)の指導方法について知りたい	2	2.4%			
⑧ 学級活動の(1)(2)(3)の違いを認識されないままに実践されている実態がある	2	2.4%			
⑨ 学級活動の進め方についての共通理解が必要	2	2.4%			
⑩ 合意形成を目指す話し合い活動がなされていない	2	2.4%			
⑪ 学級活動(2)や(3)で、意思決定して実践していくための方法を知りたい	1	1.2%			
⑫ 学校行事等のための学級活動になってしまっている	6	7.1%			
⑬ 時間の確保に課題がある	6	7.1%			
⑭ 特別活動で育成を目指す資質・能力を育てる指導方法を知りたい	4	4.8%	特別活動で育成を目指す資質・能力と指導の共通理解に関すること	10	11.9%
⑮ 特別活動で育成を目指す資質・能力を明らかにして指導する必要がある	4	4.8%			
⑯ 特別活動で育成を目指す資質・能力を育てる指導方法の共通理解が必要	2	2.4%			
⑰ 学級会の中で子供をどう見取るか、教師が何をすべきかを知りたい	3	3.6%	特別活動の指導と評価に関すること	6	7.1%
⑱ 特別活動の中で子供をどう見取るか、教師が何をすべきかを知りたい	2	2.4%			
⑲ 特別活動の評価の在り方について知りたい	1	1.2%	キャリア教育で目指す資質・能力に関すること	5	6.0%
⑳ キャリア教育の視点でカリキュラム・マネジメントをする必要がある	2	2.4%			
㉑ キャリア教育の視点で各教科等の指導をすることが難しい	1	1.2%	特別活動の指導方法の全市的な視点での共通理解に関すること	4	4.8%
㉒ キャリア教育の視点で特別活動を実施できているか不安	1	1.2%			
㉓ 職業観や勤労観を育てる必要がある	1	1.2%	キャリア教育の要としての特別活動に関すること	3	3.6%
㉔ 児童会活動で低学年の意見も大切にしている指導方法について他校の実践を知りたい	2	2.4%			
㉕ 他校の特別活動の実践の様子を知りたい	1	1.2%	キャリア教育全体についての共通理解に関すること	3	3.6%
㉖ 特別活動の指導方法を全的に広めていく必要がある	1	1.2%			
㉗ 特別活動を通してキャリア教育をすすめる実践例を知りたい	3	3.6%	キャリア在り方生き方ノートに関すること	3	3.6%
㉘ キャリア教育の共通理解を図る必要がある	3	3.6%			
㉙ キャリア在り方生き方ノートの活用についての共通理解が必要	2	2.4%	地域との連携に関すること	1	1.2%
㉚ キャリア在り方生き方ノートの効果的な活用方法を知りたい	1	1.2%			
㉛ 地域への愛着を育てることが難しい	1	1.2%			
内容別合計	84	100%	カテゴリー合計	84	100%

実施時期：2020年5月19日～6月19日

4 主題設定

新型コロナウイルス感染症対策としての学校の臨時休業のため、休業明けの6月中旬から研究員の学級における、いわゆる年度当初の学級活動を参観した。また、研究員の学級で児童生徒にアンケートを実施した。それらをもとに、各学級の課題と焦点化する資質・能力の視点について検討した。

A小学校6学年の学級の課題の一つとして、アンケート結果から「自己肯定感が低い」ということに着目した。自己のよさを生かし、学級の一員として楽しく学級生活を送ることができるようにする必要があったと考えた。B中学校2年生の学級における課題の一つとして、担任である研究員は、「他者との関わり」を挙げた。臨時休業が明けて間もない時期のためか、担任として、「みんなで楽しい雰囲気にしていこうとする思いが伝わってこない」と感じていた。そのため、よりよい人間関係による支持的風土¹²の醸成を目指していきたいと考えた。C中学校3学年の学級の課題の一つとして、担任である研究員は、「指示待ち傾向が強い」ことを挙げた。自分たちでよりよい学級をつくっていこうとする社会参画の力を育むことが必要だと考えた。

そこで、表5のように、各学級で育成を目指す資質・能力の視点を焦点化したうえで、評価の充実と指導の改善を図っていくこととした。

なお、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」は、「解説」に「三つの視点はそれぞれ重要である

表5 各学級において目指す資質・能力の視点と目指す姿

学年校	A小学校6年	B中学校2年	C中学校3年
と見えてきた課題	自己肯定感が低く、自信がない児童が多いため、自分のよさを生かして自信をもって活動する力を育てていきたい。	どこなく他人という雰囲気のため、他者との関わりを深め、学級のみんなで楽しく交流していこうとする力を育てたい。	指示待ち傾向が強いため、自分たちでよりよい学級づくりに自主的、実践的に取り組もうとする力を育てていきたい。
力資源の観点から視・点	「自己実現」の視点	「人間関係形成」の視点	「社会参画」の視点
な具体的な	自己を生かす姿	他者と協働する姿	よりよい学級・学校をつくる姿

¹² 「K. レヴィンの流れをグループダイナミクスの研究者であるJ. ギップ(1971)は、凝集性(まとまり)や生産性の向上は、重苦しい防衛風土(defensive climate)をゆるめて支持的風土(supportive climate)を高めていくことによって可能となることを明らかにしている」 高木展郎(編著)『「これからの時代に求められる資質・能力の育成」とは』2016年 東洋館出版社 p.116

が、相互に関わり合っていて、明確に区別されるものではない」¹³と示されているように、各学級の実態に応じて焦点化を図るものの、相互に関連させながら指導と評価を行っていくものである。

ここまで、2-(4)では、本市の先行研究等から学級活動の評価の研究の必要性があることについて、3-(2)では、本市の学級活動の実態から、評価の充実と指導の改善を目指す必要性があることについて述べた。4では、特別活動で育成を目指す資質・能力の三つの視点にそって焦点化して研究を進めることについて述べてきた。これらのことから、研究主題、副主題を次のように設定した。

学級活動の一連の学習過程における評価の充実と指導の改善
—自己を生かし、協働してよりよい学級・学校生活をつくる児童生徒の育成を目指して—

II 研究の内容

1 研究の構想

図5は、本研究会議の研究構想図である。本市における先行研究においては、学級活動(1)または、旧学級活動(2)のいずれかに焦点化を図った内容が多かった。しかし、特質の異なる学級活動(1)と学級活動(2)(3)の双方の機能を生かすことで、その教育的効果はより高まると考える。このことから、本研究においては、そのいずれかの内容に焦点を当てるのではなく、「指導と評価の一体化」という視点から学級活動全体を対象に研究を進めることとした。

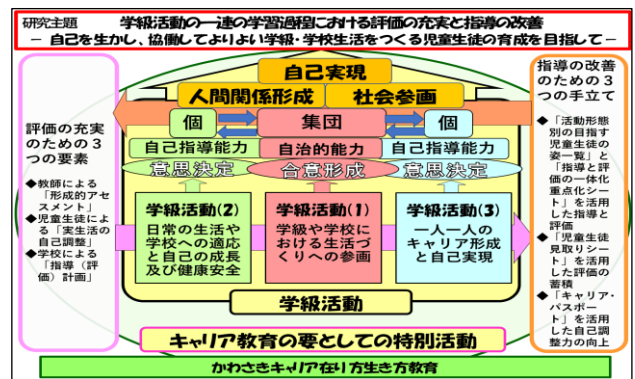


図5 令和2年度 特別活動研究会議 研究構想図

2 特別活動の評価

(1) 「解説」から見た特別活動の評価

① 「解説」の記述から見いだした特別活動の評価に求められる13の視点

「解説(小学校)」第4章第5節¹⁴には、「特別活動における評価」について、「特別活動の評価において、最も大切なことは、児童一人一人のよさや可能性を積極的に認めるようにする」と示されている。この記述を

表6 「解説(小学校)」から見いだした特別活動の評価に求められる13の視点(筆者作成)

	「解説」における評価の記載内容	「解説」から見いだした評価に求められる13の視点	3要素への分類
①	最も大切なことは、児童一人一人のよさや可能性を積極的に認めるようにする	個人内評価の視点	【1】
②	自ら学び自ら考える力や自らを律しつつ他人とともに協調できる豊かな人間性や社会性など生きる力を育成するという視点から評価を進めていく	非認知的能力の評価の視点	【1】
③	活動の結果だけでなく活動の過程における児童の努力や意欲などを積極的に認め、	形成的評価 (形成的アセスメント)の視点	【1】
④	児童のよさを多面的・総合的に評価したりすることが大切	羅生門的アプローチの視点	【1】
⑤	集団活動や自らの実践のよさを知り、	個と集団の評価の視点	【1】【2】
⑥	自信を深め、課題を見だしそれらを自らの実践の向上に生かす	自己調整の視点	【2】
⑦	児童の活動意欲を喚起する評価	教師による称賛や励ましの視点	【1】
⑧	児童自身の自己評価や集団の成員相互による評価などの学習活動	自己評価・相互評価の視点	【2】
⑨	「学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、児童が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること。」とされたことを活用する	「キャリア・パスポート」の活用視点	【2】
⑩	指導の改善に生かすという視点を重視することが重要である。	指導の改善の視点	【1】
⑪	各活動・学校行事について具体的な評価の観点を設定し、	観点別評価規準の設定の視点	【3】
⑫	評価の場面や時期、方法を明らかにする必要がある。	評価計画の視点	【3】
⑬	児童会活動やクラブ活動、学校行事における児童の姿を学級担任以外の教師とも共通理解を図って適切に評価できるようにする	教師間の評価の共有化の視点	【3】

¹³ 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編』2017年 p.12 ※中学校学習指導要領も同様

¹⁴ 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編』2017年 p.162

め、第5節に記述されている内容について本研究会議で整理し分析した結果、表6のように13の視点に整理することができた。

なお、「解説（小学校）」をもとに整理したのち、「解説（中学校）」の第4章第5節¹⁵と照合した結果、本研究会議で要約した内容は、中学校の記述にも含まれると考える。

②「解説」から見いだした特別活動の評価における3要素

次に、見いだした13の視点を、表7のように3要素に整理した。

1つ目は、【教師による形成的アセスメント】である。「形成的評価」は、梶田¹⁶がブルームの「Formative Evaluation」を日本に紹介したものである。一方、高木（2019）¹⁷は「Evaluation」が「値踏み」と訳せることから、「Assessment」（「学習過程の中で学び手がどのように向上したかを見取り、支援する評価」）が「これからの学校教育に求められる」としている。本市の先行研究としても、新田（2020）¹⁸は、「形成的アセスメント」としている。「なすことによって学ぶ」ことを指導原理とする特別活動でも、「学び手がどのように向上したかを見取り、支援する評価」をしていきたい。

2つ目は、【児童生徒による実生活の自己調整】である。これについては、24ページで詳しく述べる。

3つ目は、【学校による指導（評価）計画】である。指導計画を立てる際、評価の視点も大切にしたい。

（2）本研究会議における特別活動の評価の考え方

①「参考資料」等から見た指導要録に記載する際の特別活動の評価

「参考資料」¹⁹には、「各教科における評価の基本構造」（図6）が示されている。ここで、確認しておくべきは、「各教科における」と表記され、「各教科等における」と表記されていない点である。

各教科においては、「感性、思いやりなど」を個人内評価として評定には含まないとしている。「参考資料」には、「なお、この考え方は、外国語活動（小学校）、総合的な学習の時間、特別活動においても同様に考えることができる」とある。しかし、

「特別活動」においては、観点別に評価はするものの、その観点別の評価は公に記されることはない。「学習評価の在り方ハンドブック」（2019）²⁰に示されているように、小学校児童指導要録や中学校生徒指導要録の「特別活動の記録」の欄に、各活動及び学校行事の4項目（中学校は3項目）について、「十分満足できる活動の状況と判断される場合に○印を記入する」ことなどから、教科の「評定」

表7 「解説」から見いだした「特別活動の評価における3要素」（筆者作成）

分類番号	学習指導要領関係特別活動欄から見いだした13の視点を3つの要素に整理	特別活動の評価における3要素
[1]	「個人内評価」の視点をもって、児童生徒一人一人の「非認知的能力」を中心に、「羅生門的アプローチ」による「称賞や励まし」を大切にしながら、「個と集団」を適切に見取り、フィードバックを重視する「形成的評価」を行い、「指導の改善」に生かすことが重要であること。	【教師による形成的アセスメント】
[2]	「キャリア・パスポート」を活用するなど、児童生徒による「自己評価や相互評価」といった学習活動の工夫を図り、実生活の中での「自己調整」をする力を育成すること。	【児童生徒による実生活の自己調整】
[3]	評価を行うに当たっては、「観点別の評価規準」や「教師間での共有化」なども踏まえた「評価計画」が大切であること。	【学校による指導（評価）計画の作成】

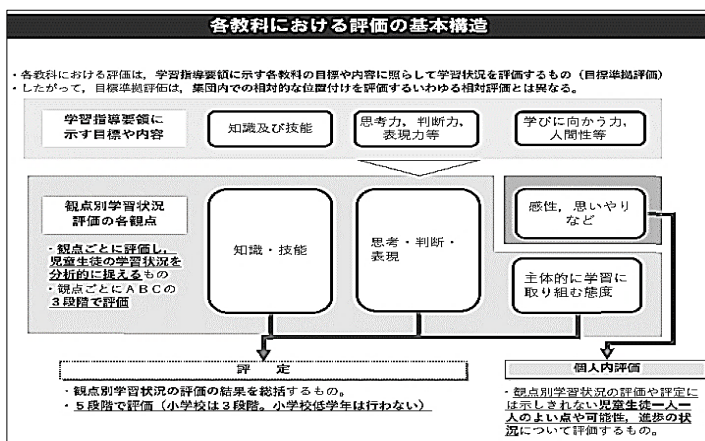


図6 各教科における評価の基本構造（「参考資料」より）

¹⁵ 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』2017年 p.137

¹⁶ 梶田叡一『形成的な評価のために』明治図書 1986年 p.190

¹⁷ 高木展郎『評価が変わる、授業を変える カリキュラム・マネジメントとアセスメントとしての評価』三省堂 2019年 pp.14-29

¹⁸ 新田瑞江『主体的・対話的で深い学び』を視点とした指導と評価の在り方 令和元年度研究紀要第33号 川崎市総合教育センター pp.33-52

¹⁹ 国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（特別活動）』東洋館出版社 2020年 pp.8-9

²⁰ 国立教育政策研究所「学習評価の在り方ハンドブック」2019年 p.7

とは質が異なることに留意する必要がある。

また、前述のように、特別活動の評価が、「児童生徒のよさや可能性を積極的に評価する」という「個人内評価」の視点を包括的に有していることや「児童生徒のよさを多面的・総合的に評価する」という「羅生門的アプローチ」²¹の視点を有していること、そして、「○が付く」「○が付かない」の2段階であることなどから、必ずしも5段階の「5」や3段階の「3」のみが「○」に相当するというわけではないことにも留意する必要があるといえる。

「学習評価の在り方ハンドブック」に、図7が示されている意図を鑑みると、このように比較的多くの○が付くよう、児童生徒のよさを積極的に評価することが特別活動の評価の特質といえる。このことから、児童生徒が主体となって「なすことによって学ぶ」中で、教師が積極的に児童生徒のよさや可能性をフィードバックすることが重要であると考えられる。

特別活動の記録							
内容	観点	学年					
		1	2	3	4	5	6
学級活動	よりよい生活を築くための知識・技能	○		○	○	○	
児童会活動	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現		○	○		○	
クラブ活動	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度				○		
学校行事			○		○	○	

小学校児童指導要録(参考様式)様式2の記入例(5年生の例)

図7 小学校児童指導要録の記入例
(「学習評価の在り方ハンドブック」より)

②「多面的・総合的」に評価することと評価の観点を「重点化」という二つの側面の捉え

特別活動の評価に求められる13の視点の④で示したように、児童生徒のよさや可能性を「多面的・総合的」に評価することが求められている。一方で、「参考資料」には、「学習過程の活動に即して評価の観点を重点化し、効果的で効率的な評価になるようにしたい。」²²と示されている。これは、観点を「重点化」して絞った上で、「目標に準拠した評価」を行うものである。

この、一見、矛盾するような二つの評価の側面をどのように捉えればよいのであろうか。

石井(2015)²³は、教育評価の在り方として、「目標に準拠して評価することが、必ずしも目標のみにとらわれた評価になるとは限らない。目標を実践上の仮説ととらえるなら、目標自体が再検討の対象となり、目標に準拠しつつ、『目標にとらわれない評価』も併用して、学習成果を包括的に把握することが重要となる。その際、量的評価と質的評価、結果志向とプロセス志向、教師による外的評価と学習者自身による内的評価、これらを統一する評価方法が求められる」と述べている。

本研究は、石井の述べている「これらを統一する評価方法」について明らかにするものではない。しかし、「多面的・総合的」と「重点化」という二つの側面を「併用」することは可能であると考えられる。つまり、学級活動の指導の計画段階では、まずは「多面的・総合的」な視点で、目指す児童生徒の姿を想定しつつ、観点毎の評価規準に即して「重点化」した「目指す児童生徒の姿」を明確に設定して指導にあたる。その際、予め重点化した内容や場面以外で、十分に満足できる活動の様子が見られた場合には、目標だけにとらわれることなく、これを積極的に評価しフィードバックすることが重要であると考えられる。また逆に、支援が必要な活動の状況が見られた場合には、その児童生徒や学級全体に対して積極的に支援していく必要がある。

これらのことから、特別活動の評価は、発達の段階に応じて、一連の学習過程における目指す児童生徒の姿を予め想定した上で、児童生徒のよさや可能性を多面的・総合的に見取ってフィードバックする形成的アセスメントを重視し、指導の改善に生かして、児童生徒の資質・能力を伸ばしていくことができるようにするためのものであると、本研究会議ではとらえる。

²¹ 『新しい教育評価入門』有斐閣コンパクト(2015)によれば「羅生門的アプローチ」とは、「当時の文部省とOECDとの共催で開かれた『カリキュラム開発に関する国際セミナー』においてアトキンが提起したもの」であり、名称の由来は、「黒澤明監督が映画化した『羅生門』であり、同一の事件が異なる立場・視点の人々からいかに違って見えるかが描かれ」ていることからくる。これは、「目標に準拠した評価」を志向する「工学的アプローチ」と対の関係にある。

²² 国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(特別活動)』東洋館出版社 2020年 p.92

²³ 西岡加名恵・石井英真・田中耕治『新しい教育評価入門』有斐閣コンパクト 2015年 p.39

3 研究の方法

「解説」から見いだした「特別活動の評価のための3要素」として、【教師による形成的アセスメント】【児童生徒による実生活の自己調整】【学校による指導（評価）計画】に整理したことについては既に述べた。この3要素をもとに、必要な手立てについて検討し、図8のように三つにまとめた。

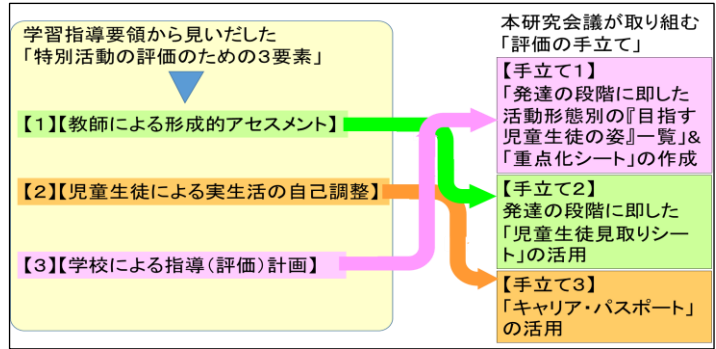


図8「特別活動の評価のための3要素」に基づく、本研究の三つの手立て

(1) 「発達の段階に即した活動形態別の目指す児童生徒の姿一覧」と「重点化シート」の作成

一つ目は、3要素の【学校による指導（評価）計画】の一つとして図9及び図10のように、「発達の段階に即した活動形態別の『目指す児童生徒の姿』一覧（例）」（以下、「一覧」という。）を作成した。

学級活動(1) 発達の段階に即した活動形態別の「目指す児童生徒の姿」一覧(例) 小学校 5・6年生				
「参考資料」例示 学級活動(1) 5・6年生評価規準		よりよい生活を築くための知識・技能 みんなで楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために他者と協働して取り組むことの意義を理解している。合意形成の手順や深まりのある話し合いの進め方を理解し、活動の方法を身に付けている。	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現 楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために、問題を発見し、解決方法について多様な意見を生かして合意形成を図り、信頼し支え合って実践している。	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度 楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために、見通しをもったり振り返りながら、自己のよさを発揮し、役割や責任を果として集団活動に取り組もうとしている。
「話し合い活動」における「目指す児童の姿」				
一連の学習過程		よりよい生活を築くための知識・技能	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度
事前の活動	① 問題の発見・確認	問題の発見 議題箱の意義について理解し、楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるための問題発見の方法を身に付けている。	問題の発見 楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために、議題箱に入れるなど、考えを表現している。	問題の発見 楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために、見通しをもったり振り返りながら、自分たちで問題を発見しようとしている。
	② 計画委員会の話し合いの計画・当日の役割分担・議題の伝達・議題の決定	計画委員会 学級会や計画委員会の役割や合意形成の手順など、効率的な話し合いの進め方を理解し、身に付けている。 提案者として、学級全体に提案理由を伝えることの意味を理解している。 提案者の提案理由を聞き、議題について話し合い、学級会へ向けた準備の進め方を身に付けている。	計画委員会 話し合い、議題の選定や役割分担、話し合いの進め方などについて考え、活動計画を立てている。 話し合っている。 提案者として、提案理由を自分なりに伝えるよう工夫しようとしている。	計画委員会 楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるための学級会へ向けて、見通しをもって計画委員会の活動を自主的に行おうとしている。
本時の活動(話し合い活動)	③ 解決方法等の話し合い	【話し合い】 集団討議による合意形成 問題や意見を整理し、少数意見も大切に話し合いを進める方法を身に付けている。 【黒板記録・ノート記録】 意見を分類して短冊を貼ったり、発言の要点を簡潔にまとめて記述したりする方法を身に付けている。 【フロア児童】 合意形成の手順や深まりのある話し合いの進め方を理解し、必要な方法を身に付けている。	【話し合い】 集団討議による合意形成 時間を意識しながら、話し合いの流れに沿って積極的に関与し、話し合いを進めたり、公平に指名したりしている。 【黒板記録・ノート記録】 友達の見解を傾聴し、意見の要点をまとめて、分かりやすく書いている。 【フロア児童】 解決方法について、多様な意見のよさを生かして話し合っている。	【話し合い】 集団討議による合意形成 司会グループの体間と、信頼し支え合って主体的に話し合いを進めようとしている。 【黒板記録・ノート記録】 司会グループで信頼し支え合って、記録の役割を主体的に行おうとしている。 【フロア児童】 自己のよさを発揮し、主体的に学級会に参画しようとしている。
	④ 決めたことの実践	【実践】 みんなで楽しく豊かな学級や学校の生活をつくる意義を理解し、決めたことを実践するために必要な方法を身に付けている。	【実践】 合意形成したことについて、信頼し支え合って実践している。	【実践】 合意形成したことについて、自己のよさを発揮し、自主的に役割や責任を果して取り組もうとしている。
事後の活動	⑤ 振り返り	一連の学習過程の振り返り 一連の活動を振り返り、自分や友達の様子や自分たちの学級としての成長に気付くことの意味を理解している。	活動全体を振り返って、経験を通して感じた、自他の成長や学級の向上の視点をふまえて、学級会ノートに書いている。	一連の活動を通して自他の成長や学級の向上について振り返ろうとしている。
	⑥ 解決への課題	【見直し】 一連の活動のよさを生かして、次の活動や更なる課題解決へ向けたことの意味を理解している。	活動全体を振り返って考えたことをもとに、次の活動に自己を生かす視点で学級会ノートに書いている。	自他の成長や学級の向上に関することを振り返って次の活動に生かし、楽しく豊かな学級や学校の生活をつくらうとしている。
「係活動」における「目指す児童の姿」				
係活動における目指す児童の姿 5・6年生		よりよい生活を築くための知識・技能 楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために係活動に取り組む意義を理解し、創意工夫を生かした活動に必要な方法を身に付けている。	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現 見通しをもって活動計画を立て、信頼し支え合って実践している。	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度 自分のよさを生かす活動を見つけて、見通しをもったり振り返りながら取り組もうとしている。
「集会活動」における「目指す児童の姿」				
集会活動における目指す児童の姿 5・6年生		よりよい生活を築くための知識・技能 集会活動の意義や運営の仕方について理解し、計画や運営、準備など活動に必要な方法を身に付けている。	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現 集会の計画や運営について、見通しをもって活動計画を立てるなど、信頼し支え合って実践している。	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度 楽しく豊かな集会活動するために、見通しをもったり振り返りながら取り組もうとしている。
3・4年生		よりよい生活を築くための知識・技能 【話し合い】 話し合いの意義や目的について理解し、計画や運営、準備など活動に必要な方法を身に付けている。	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現 【話し合い】 話し合いの意義や目的について理解し、計画や運営、準備など活動に必要な方法を身に付けている。	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度 【話し合い】 話し合いの意義や目的について理解し、計画や運営、準備など活動に必要な方法を身に付けている。
目指す児童生徒の姿 1・2年生		集会活動の楽しさを知り、自分の役割について理解し、簡単な役割分担や準備の仕方を身に付けている。	集会活動の楽しさを知り、自分の役割について理解し、簡単な役割分担や準備の仕方を身に付けている。	集会活動を楽しみながら見直しをもったり振り返りながら取り組もうとしている。

図9 学級活動(1) 発達の段階に即した活動形態別の「目指す児童生徒の姿」一覧(例) 「参考資料」及び「すぐに使える特別活動資料集」(平成24年度川崎市立西御幸小学校 研究推進校研究報告会資料)、「話し合い活動で育てたい資質・能力」(高橋「自治的、自発的態도를育む学級活動」2006)を参考に本研究会議で作成。

学級活動(2)(3) 発達の段階に即した活動形態別の「目指す児童生徒の姿」一覧(例) 小学校 5・6年			
学級活動(2) 5・6年評価規準 日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全 「参考資料」例示	よりよい生活を築くための知識・技能 日常生活への自己の適応に関する諸課題の改善に向けて取り組むことの意義を理解し、健全な生活を送るための知識や行動の仕方をも身に付けている。	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現 日常生活への自己の適応に関する諸課題を認識し、解決方法などについて話し合い、自分に合ったよりよい解決方法を意思決定して実践している。	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度 自己の生活をよりよくするために、見通しをもったり振り返りながら、自主的に課題解決に取り組む。他者と信頼し合ってよりよい人間関係を形成しようとしている。
学級活動(3) 5・6年評価規準 一人一人のキャリア形成と自己表現 「参考資料」例示	よりよい生活を築くための知識・技能 希望や目標をもつこと、働くことや学ぶことの意義を理解し、自己のよさを生かしながら将来への見通しをもち、自己実現を図るために必要な知識や行動の仕方をも身に付けている。	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現 希望や目標をもつこと、働くことや学ぶことについて、よりよく生きるための課題を認識し、解決方法などについて話し合い、自分に合った解決方法を意思決定して実践している。	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度 現在及び将来にわたってよりよく生きるために、見通しをもったり振り返りながら、自己のよさを生かし、他者と協働して、自己実現に向けて自主的に行動しようとしている。
「学級活動(2)(3)における「目指す児童の姿」【 】は、題材に応じて変更 []は(3)			
事前の活動 ① 確認 問題意識を高める(アンケート等)	アンケートやキャリア・パスポートなどによって、自己の【日常生活への適応等またはキャリア形成】を見つめ直す意義について理解している。	アンケートに答えたり、キャリア・パスポートを活用したりして、自己の【日常生活への適応等またはキャリア形成】の現状について考えている。	アンケートに答えたり、キャリア・パスポートを活用したりして、自己の【日常生活への適応等またはキャリア形成】について主体的に顧みようとしている。
本時の活動(話し合い活動) ② 課題の把握 必要性の実感 課題を【つかむ】	アンケート結果等から、【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する自分たちの共通の課題に気付いている。	アンケートの結果などから、【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する自分たちの共通の課題について考え、表現している。	アンケート結果から、【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する自分たちの共通の課題を主体的に見いだそうとしている。
③ 原因の追究 原因 【よさや可能性】を【さぐる】	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する課題の原因や解決のために必要な事柄について、担任やT2などからの資料をもとに、理解している。	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する課題について、その原因(自己のよさや可能性)を探り、これまでの経験や友達の見解を参考にしながら考えている。	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する資料等から、その原因(自己のよさや可能性)について主体的に探ろうとしている。
④ 解決方法等の話し合い 解決方法を【見つける】	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する課題の解決方法を見つめるため、多様な考えを生かした話し合いの仕方を理解し、身に付けている。	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する課題の解決方法について、多様な考えを生かして話し合っている。	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する課題の解決方法を、多様な考えを生かした話し合いをもとに、主体的に見つけようとしている。
事後の活動 ⑤ 個人目標の意思決定 めあてを【決める】	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する課題の解決方法について、自分に合った具体的なめあての書き方を理解している。	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する自分に合った具体的なめあてを、話し合いを生かして意思決定し、学習カードに書いている。	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する解決方法について、話し合いをもとに意思決定し、主体的に行動しようとしている。
⑥ 実践 決めたことの実践【実行する】	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する自分のめあてを実践することの意義について理解している。	【日常生活への適応等またはキャリア形成】についての、自分のめあてを実践している。	【日常生活への適応等またはキャリア形成】について、自分のめあてに自主的に取り組むことで、自己の生活を向上させようとしている。
⑦ 振り返り 実践の【振り返り】	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する自分の実践を振り返り、その努力や成果、課題等を理解している。	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する実践を振り返り、その努力や成果、課題等を振り返りカードに書いている。	【日常生活への適応等またはキャリア形成】についての自己の実践を振り返り、見直しをもって、自己の生活の向上に向けて、自主的に実践し続けようとしている。
⑧ 次への見通し 解決への課題	【日常生活への適応等またはキャリア形成】に関する自分の実践の振り返りを生かして、今後の生活を改善していく意義について理解している。	今後の自己の【日常生活への適応等またはキャリア形成】のための生活の仕方について、今後の見直しをもって振り返りカードに書いている。	【日常生活への適応等またはキャリア形成】について、自主的に実践し続けようとしている。
決へ	大きく理解している。	て振り返りカードに書いている。	3・4年 ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
決へ	大きく気付いている。	ことなども含めて振り返りカードに書いている。	1・2年 ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
課題 解決	を生かして、今後の生活を改善していく意義を理解している。	仕方について、今後の生活を見据えながら振り返りカードに書いている。	中学校 ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

図 10 学級活動(2)(3) 発達の段階に即した活動形態別の「目指す児童生徒の姿」一覧(例)
 「参考資料」及び「すぐに使える特別活動資料集」(平成 24 年度川崎市立西御幸小学校 研究推進校研究報告会資料)を参考に本研究会議で作成

「参考資料(小学校)」には、学級活動(1)について、「発達の段階に即した活動形態別の評価規準例」として例示されているものがある。しかし、これは、「評価規準」という言葉が使用されており、いわゆる「内容のまとまりごとの評価規準」との混同が危惧される面もあるため、「目指す児童生徒の姿」とすることにし、「指導案」における「目指す児童生徒の姿」と連動できるようにした。また、「参考資料(小学校)」には、事前の活動、本時の活動、事後の活動といった一連の学習過程や話し合い活動、係活動、集会活動といった活動形態ごとに、低学年・中学年・高学年の目指す姿が例示されており、教師目線で見ると、どこを見ればよいか戸惑うという課題が見られた。そこで、学級活動(1)及び(2)(3)のそれぞれで、低学年・中学年・高学年・中学校と、発達の段階ごとに1枚にまとめることで、1年間はその1枚を見ればどのような姿を各活動場面で目指すとよいかの明確になるように工夫した。

しかし、網羅的に示した「一覧」だけでは、学級活動の評価への負担感を感じたり、この中のどこに重点化を図って評価して指導に生かすとよいのかが明確でなかったりするといった課題が見えてきた。また、本市の「キャリア在り方生き方ノート」には、児童生徒が活用できる学級会の流れを示した資料が提示されているが、それに加えて教師が指導に生かすための簡潔な学級活動の資料があれば、更に効果的であると考えた。そこで「一覧」の他に、学級活動の一連の学習過程と基本的な指導のポイントを明示した、教師が児童生徒の実態に合わせて評価の重点化を図るための「指導と評価の一体化 重点化シート」（以下、「重点化シート」という。）の学級活動(1)版及び(2)(3)版を独自に作成した（図11）。

「学級会」これだけは！！ 学級活動(1) 指導と評価の一体化 重点化シート
第 四 年 組 学 級 会 「 講 題 」
 一連の学習過程 指導のポイント 目指す児童生徒の姿

事前の活動
 ①問題の発見・確認
 ・議題箱に「〇〇〇」という思いを入れる
 ・計画委員会（司会グループ+提案者）で決められた「提案」の中から「議題」を決定する。
 ★輪番の司会グループと提案者を中心に準備できるようにする。
 ○議題箱に入らない場合は、議題例を示すなど実態に応じて指導する。
 【知識・技能】
 ※「目指す児童生徒の姿一覧」をもとに記入（計画委員会中心）

本時の活動（話し合い活動）
 ②解決方法等の話し合い
つかむ 実態や現状の把握
 1. アンケートの結果から気付いたことなどを話し合い、自分たちの共通の課題をつかむ。
 ★「アンケート」を通して、児童生徒の「題材」に対する意識を高められるようにする。
 「前期の自分」に関わる「自己の生活」を振り返り「自己の課題」に気付くことができるようにする。
さぐる 原因の追究
 可能性への気付き
 2. 原因や解決する必要性（自分のよさや可能性）などについて、資料等をもとに考え、話し合う。キャリアパスを見て気付いたグループを全体へ発表する。
 ★原因や解決する必要性、自分のよさなどを考えられるようにする。
 校内の人材とのITを実施したり、映像資料や写真資料等を提示したりするなど、必要な情報を提示し「どう考えられるようにする。キャリアパスについて発表する」
見つける 解決方法等の話し合い
 3. よりよい解決方法や努力事項などについて話し合う。
 ★解決方法や努力事項について出てきた見つけられるようにする。
 多様な考えを出し合えるように投げかけ、意見を分類しながら板書し、「個人目標（めあて）」を決定する際の助となるよう留意する。
決める 個人目標の意思決定
 4. 題材に関する自分の個人目標（めあて）を意思決定し、学習カードに記入する。
 ★具体的な個人目標を決め、実行の強い決意をもてるようにする。
 自分に合った、具体的な個人目標（めあて）を書くように助言する。
 →みんなが発表してほしい！！

事後の活動
 ④決めたことの実践
実行する
 ・自分が立てた個人目標（めあて）を意識して実践する。
 ★決めた個人目標を実行できるように、認めたり助ましたりする。
 一人一人の個人目標を提示するなどして、実践の意欲付けとなるようにする。
 担任も勇気に声をかけたい！！
 ⑤振り返り
振り返って新たな見通しをもつ
 ・自分の実践を振り返り、学習カードに記入する。
 月に1回はめあてを振り返る→7月頃全体を振り返る。
 ★自分たちでよりよい学級生活をつくりたいと思うようにする。
 振り返りの機会を設定し、継続的な実践になるようにしたり、必要に応じて新たな目標を立てて取り組んだりできるようにする。6月頃に卒業に向けてめあてを振り返る。

【教師の振り返り】
 子ども自身が発言や映像資料によりキャリアパスの意義を理解し、効果的だと感じた。子どもたちはよりよい後期にいくために自分に合っためあてを立てていた。展開の中で「将来を見通す」という視点が弱かった。「中学生に向けては将来の自分を見据えた行が立てられるような実践を目指したい。」

図 11 学級活動「指導と評価の一体化 重点化シート」の活用例（令和2年度 川崎市総合教育センター特別活動研究会議作成）

(2) 「児童生徒見取りシート」(評価補助簿)の活用

二つ目は、【教師による形成的アセスメント】を記録し蓄積しておくための「児童生徒見取りシート」

(以下、「見取りシート」という。)の活用である(図12)。この「見取りシート」は、「参考資料」に紹介されているものに準じて作成している。

児童生徒のよさをフィードバックした際に、この「見取りシート」に記録しておくことで、形成的アセスメントの蓄積を総括し、指導要録に根拠をもって記録することが可能となる。単に望ましい言動が見られた際に○を付けておくだけでなく、メモ欄に記述しておくことで、通知表の所見欄や指導要録の「総合所見及び指導上参考となる諸事項」の欄に記述することも可能となる。

さらには、○が付いていない児童生徒を把握することもできるため、次の時間には当該児童生徒を重点的に観察してフィードバックしたり、必要な指導をしたりすることも可能となる。

図12 児童生徒見取りシートの例
(「参考資料」を参考に、本研究会議で作成)

(3) 「キャリア・パスポート」を活用した「実生活の自己調整」

三つ目は、【児童生徒による実生活の自己調整】の一環としての「キャリア・パスポート」の活用である。今回の学習指導要領で、「児童(生徒)が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること」²⁴と明記されたことを受け、「キャリア・パスポート」が令和2年度から全面実施となった。「キャリア・パスポート」をポートフォリオとして、年間5枚以内の記録を蓄積していくこととされている²⁵。

特別活動勉強会「つながり」(2020)が全国の小学校教員652人に行った調査²⁶によれば、「キャリア・パスポート」について「学校として提案があり実践している」という学校は8月段階で66.7%であった。それらの学校においても、多くは「キャリア・パスポート」として蓄積するものを決めた段階であった。

しかし、本来の「キャリア・パスポート」は、蓄積したものを「教材」として児童生徒が活用し、自分の過去を振り返り、将来への見通しをもって現在の自分を見つめ、行動目標を意思決定して実践するためのものである。つまり、将来を見据えた「実生活の自己調整」を行うためのものであるととらえた。

「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」において「子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行い」²⁷とあるように、「学習に関する自己調整」の重要性が述べられている。特別活動における学習の対象は、実生活そのものであるといえる。そこで、本研究会議においては、「学習に関する自己調整」を「実生活の自己調整」ととらえ直した。自己評価の視点から児童生徒が「キャリア・パスポート」を活用して「実生活の自己調整」を行い、自己の成長へ向かって実践していく活動を行うこととした。

4 検証授業の実際

(1) 「自己実現」に焦点化した実践【A小学校 第6学年】

① 検証授業Ⅰ 学級活動(1) 議題「夏まつり集会をしよう」

A小学校では、夏休み明けの8月27日に学級活動(1)の実践を、図13のように行った。

²⁴ 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)』2017年 p.181

文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)』2017年 p.164

²⁵ 文部科学省『「キャリア・パスポート」の様式例と指導上の留意事項』2019年8月21日

²⁶ 「第3回 新型コロナウイルス感染症の対応に伴う小学校における特別活動の現状に関する調査」特別活動勉強会「つながり」(2020) ※「特別活動 希望の会」ホームページ <https://kibounokai.web.wox.cc> (2020年8月31日)より

²⁷ 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」2019年1月21日 p.9

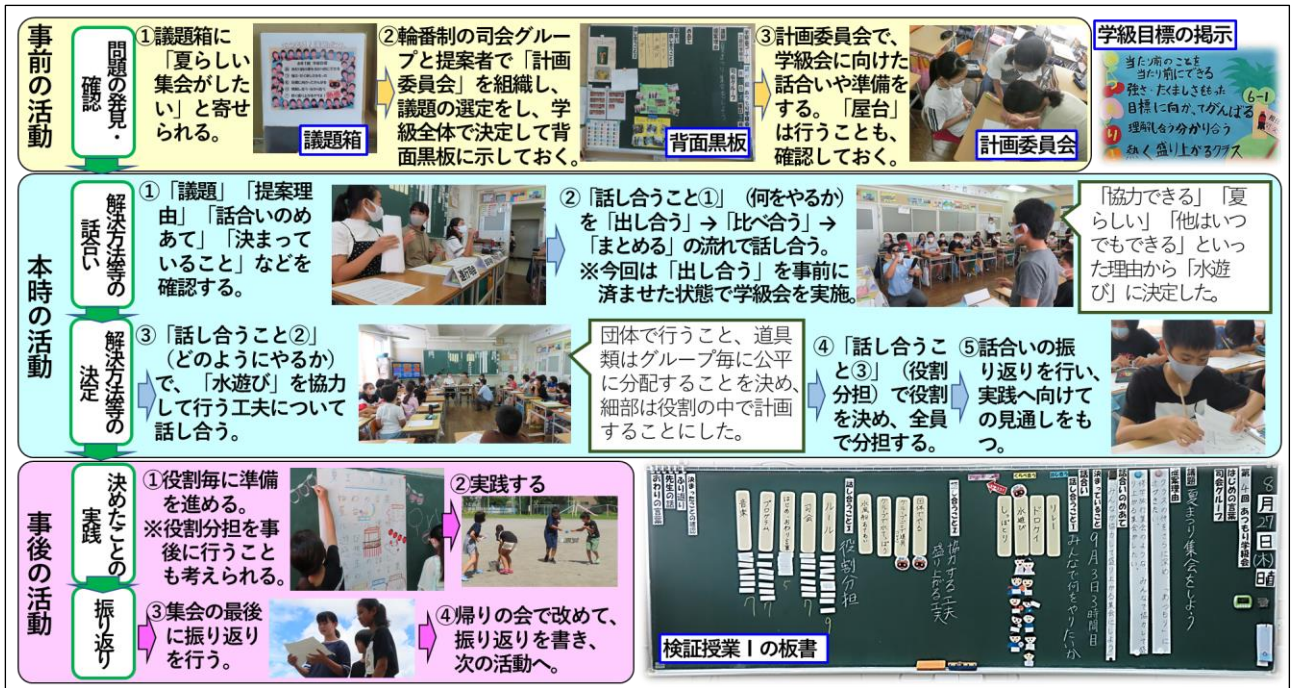


図13 検証授業Ⅰ【A小学校 学級活動(1)「夏まつり集会をしよう」】の実際の様子 本時8月27日 事後9月4日

②検証授業Ⅱ 学級活動(3) 題材「後期のめあて」

「自己実現」に焦点化したA小学校では、10月15日に学級活動(3)アの実践を、図14のように行った。

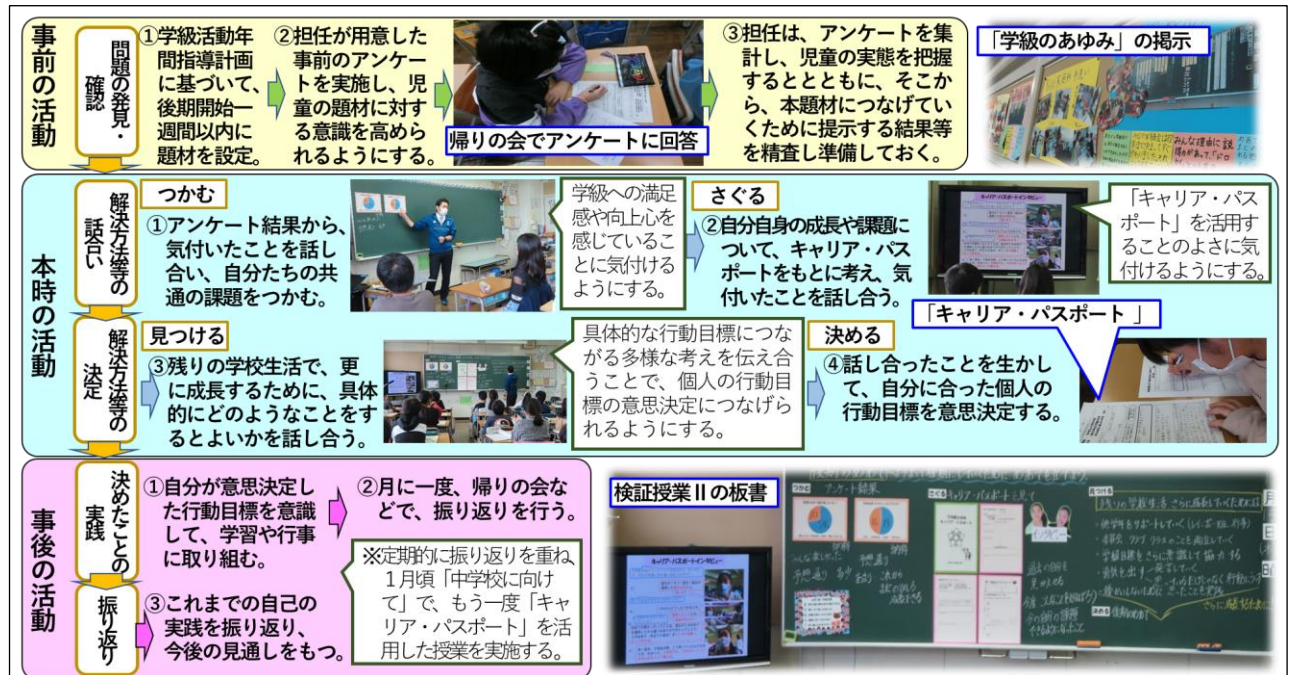


図14 検証授業Ⅱ【A小学校 学級活動(3) 題材「後期のめあて」】の実際の様子 本時10月15日

③考察

ア 「一覧」の活用と指導の改善

検証授業の実施にあたり、【手立て1】の「一覧」を活用し、重点化する観点及び目指す児童の姿を図15のように指導案に記述するようにした。これにより、指導の際に目指す姿がより明確になり、評価の充実と指導の改善に生かすことができた。特に、学級会後の「先生の話」では、表8のような視点で、学級会における児童の姿を見取り、フィード

7. 話し合い 話し合うこと① みんなで何をするか	○進め方などでつまずいた時には、近くで助言する。 ○話し合いのめあてからそれた場合は、めあてを再度確認するよう声をかける。	☆時間を意識しながら、話し合いの流れに沿って臨機応変に話し合いを進めたり、公平に指名したりしている。 (進行司会・指名司会)
話し合うこと② 役割分担	○できるだけ自分たちで決定できるように見守り、話し合いが行き詰ってしまった時には助言する。 ○友達のことを想像し、そこに寄り添って聞くことしたり、相手に応えるために自分の思いを伝えようとしたりする姿を見取り、本時や事後の活動などに生かせるようにする。	☆友達の意見を傾聴し、意見の要点をまとめ、わかりやすく書いている。 (黒板記録・ノート記録) ☆解決方法について、多様な意見のよさを生かして話し合っている。 【思考・判断・表現】(観察)
8. 決まったことの確認		

図15 「後期のめあて」指導案の抜粋(「目指す児童の姿」)

バックすることができていた。重点化のみを考慮した場合には、ここまで広い視野で児童や学級全体のよさを見取ってフィードバックできていないものと考え。重点化を図るとともに多面的・総合的な視点を持ち合わせて指導に当たるためにも「一覧」の活用は、概ね有効であった。

一方で、日常の学級活動の指導において、指導案を作成する機会は多くはない。教師が日常の指導と評価に生かすことができる簡潔な資料の必要性が見えてきた。そこで、23ページに示した「重点化シート」の作成に至り、これ以降の検証授業において活用した。

イ 「キャリア・パスポート」の活用と指導の改善

検証Ⅱでは、学級活動(3)「後期のめあて」を実施した。その際、これまでに蓄積した「キャリア・パスポート」を活用した(図16)。ここでは、5年次の学級活動(3)で使用した「6年生に向けて」、6年6月(本来なら4月実施)の「6年生になって」、修学旅行の代わりに学級活動(1)「修学旅行集会をしよう」のワークシートを蓄積してある。

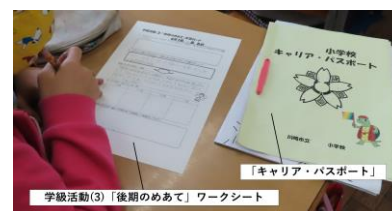


図16 「キャリア・パスポート」の活用の様子

表9は、授業後に児童を対象に行ったインタビューにおける児童の言葉の抜粋である。「キャリア・パスポート」があることによって、「自分(の成長)に気付くことができる」「中学校でめあてを立てるときにも使える」「自分では気付けないことが担任のコメントから分かる」といった児童の言葉からは、「キャリア・パスポート」を活用して自己を振り返り、少し先の将来への見通しをもって、後期のめあてを立てることができていたといえる。このことから、【手立て3】としての「キャリア・パスポート」の活用は、「実生活の自己調整」につながったといえることができる。

表8 学級会後の「先生の話」から見出したフィードバックの視点

①学級全体へのねぎらい
②担任の率直な感想(感動、うれしい、すばらしい)
③話合いの流れの称賛
④話合いの内容(よかった発言等)の称賛
⑤学級会の積み重ねによる学級の成長を称賛
⑥司会グループの児童の称賛
⑦その司会のがんばりに応えたフロア児童の称賛
⑧実践へ向けての期待を述べる
⑨学級目標へつながるといふ価値付け
⑩安堵感も正直に伝える
⑪話合い後の個別のフィードバック

表9 授業後の児童インタビューにおける児童の言葉(抜粋)

A 児童さん	(キャリア・パスポートは、)見返せるし、なんか、自分ももっと気付くことができるから、「身近にあってすぐ見える」っていうのがいい!!
児童Bさん	(キャリア・パスポートは、)まあ、小学校では(もう)ないかも知れないけど、中学校でめあてを立てるときにも使えると思う。 (担任からのコメントを読んで)私は、「本当に、キラキラ輝いて見えました」って書いてもらったんですけど、なんか、自分じゃ気付けないことがあって、それを書いてもらって、自分のめあてを立てやすくなった。
C 児童さん	(担任からのコメントを読んで)ちゃんと見てくれているんだなって。全体もそうだけど、個人個人、見てくれているんだなって感じました。うれしいです。ちゃんと見てくれているんだなって。

ウ 学級活動の積み重ねによる「自己実現」の視点での児童の変容

表10は、児童Bさんが学級活動(3)で立てためあて等の変遷をまとめたものである。担任のコメント、つまりフィードバックにより、6月に立てた「楽しむ」というめあてが、「行動にうつす」と変容し、「実生活の自己調整」を行っていることが、表9のインタビューと合わせて考察すると見えてくる。また、学級活動(3)に留まらず、学級活動(1)における集会活動の経験が、今回の意思決定に大きく影響しているといえる。

表11は、全26項目の四件法のアンケートのうち、事前と事後で肯定的な回答の上昇率が高かった項目上位3点を示したものである。割合としては高いとは言えない項目もあるものの、この3点の上昇率が上位を占めたことから、学級活動の積み重ねにより、話合いを生かして目標をもって実践する活動を通して自己肯定感が高まり、「なりたい自分を目指し、自分らしく生きる」という自己実現の視点での児童の変容につながったといえる。

表10 A小学校児童Bさんのめあて等の変遷

実施月	記述の項目	記述内容
6月	(3)「6年生になって」のめあて	一生懸命全力で楽しむ(集会・行事)
	めあてに込めた思い	真面目に行動することも大切だけど、楽しむときは全力で楽しみたい。最後の一年間はこれまで以上に楽しむ。
9月	「6年生になって」の振り返り(帰りの会で記入)	集会や行事では思いっきり楽しめました。目標が達成できたと思います。修学旅行集会や夏まつり集会で120パーセント楽しんで、忘れられない集会になりました。
	担任のコメント	前期のAさんは、本当にキラキラ輝いて見えました。どんなことにも前向きに全力で取り組んできた結果だね。
10月	(3)「後期のめあて」のめあて	考えるだけではなく、行動にうつす
	めあてに込めた思い	やりたいことがあっても、行動しないと実践しないので、このめあてにしました。実際、修学旅行集会や夏まつり集会では、行動したからの楽しさなので、後期は実現のためにどんどん行動に移して、楽しい活動をしていきたい。

表11 児童アンケートで上昇率が高かった項目とその結果

No.	質問番号	質問内容	6月	11月	差(p)	上昇率(倍)
①	質問11	自分にはよいところがある	38.9%	55.5%	16.6	1.43
②	質問24	話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり広げたりできている	66.6%	86.1%	19.5	1.29
③	質問8	「学級活動」の話合いを生かしてめあてを決めて行動している	77.7%	97.2%	19.5	1.25

(2)「人間関係形成」に焦点化した実践【B中学校 第2学年】

①検証授業Ⅰ 学級活動(2) 題材「体育祭に向けて～絆を深めるために～」

「人間関係形成」に焦点化したB中学校では学級活動(2)アの実践を、図17のように行った。

事前の活動

- 問題の発見・確認**
 - ①学級活動年間指導計画に基づいて、体育祭の1ヶ月前に題材を設定。
 - ②担任が用意した事前のアンケートを実施し、生徒の題材に対する意識を高められるようにする。

本時の活動

- 話し合い**
 - つかむ**
 - ①アンケート結果から、気付いたことを話し合い、自分たちの共通の課題をつかむ。
 - さぐる**
 - ②絆を深めることで、どんなよいことがあるのかを焦点化を図るための資料をもとに考え、話し合う。
- 解決方法等の決定**
 - 見つける**
 - ③絆を深める体育祭にするために、どのような場面でのようなことをするよいかを話し合う。
 - 決める**
 - ④話し合ったことを生かして、自分に合った個人の行動目標を意思決定し、発表する。

事後の活動

- 実践**
 - 行動する**
 - ①自分が意思決定した行動目標を意識して、練習や本番に取り組む。
- 振り返り**
 - ②体育祭後に振り返りを行う。

検証授業Ⅰの板書

「体育祭に向けて～絆を深めるために～」

つかむ アンケート結果
さぐる 絆を深めることで、どんなよいことがあるのかを焦点化を図るための資料をもとに考え、話し合う。

見つける 絆を深める体育祭にするために、どのような場面でのようなことをするよいかを話し合う。

決める 話し合ったことを生かして、自分に合った個人の行動目標を意思決定し、発表する。

行動する 自分が意思決定した行動目標を意識して、練習や本番に取り組む。

振り返り 体育祭後に振り返りを行う。

※体育祭の「めあてカード」や「振り返りカード」を両面で作成し、「キャリア・パスポート」とする。

図17 検証授業Ⅰ【B中学校 学級活動(2)題材「体育祭に向けて～絆を深めるために～」】の実際の様子 本時9月8日

②検証授業Ⅱ 学級活動(1) 議題「信じ合う心高めめる企画をしよう」

B中学校における学級活動(1)は、学級目標の「信じ合う心」を高めるために、図18のように行った。

事前の活動

- 問題の発見・確認**
 - ①前回の学級活動(2)の振り返りの中で信じ合う心高めたいという思いが寄せられる。
 - ②立候補制の司会グループと提案者で「プログラム委員会」を組織し、議題の選定をし、学級全体で決定する。

本時の活動

- 話し合い**
 - ①「議題」「提案理由」「話し合いのめあて」「決まっていること」などを確認する。
 - ②「話し合うこと①(何をするか)」を「出し合う」→「比べ合う」→「まとめる」の流れで話し合う。 ※今回は「出し合う」を事前に済ませた状態で学級会を実施。
- 解決方法等の決定**
 - ③「話し合うこと②(どう工夫するか)」で、「絵の伝言ゲーム」を通して、どう信じ合う心高められるのかについて考え、話し合う。
 - ④話し合いの振り返りを行う。

事後の活動

- 実践**
 - ①役割毎に準備を進める。 ※役割分担を事後に行う。
 - ②企画を実践する
- 振り返り**
 - ③企画の実践後に振り返りを行う。
 - ④帰りの会等で改めて、振り返りを書き、次の活動へ。

検証授業Ⅱの板書

学級目標の掲示
ブルースター
～信じ合う心～

話し合うこと①(何をするか)
話し合うこと②(どう工夫するか)

話し合いの振り返り

図18 検証授業Ⅱ【B中学校 学級活動(1)議題「信じ合う心高めめる企画をしよう」】の実際の様子 本時10月27日

③考察

ア 「一覧」及び「重点化シート」の活用と指導の改善

全体で2回目となった本学級の検証Ⅰ以降は、「一覧」に加えて「重点化シート」を作成し活用した。図19は、実際に書き込んだ「重点化シート」の抜粋である。事前の活動では「主体的態度」、本時の活動では「思考・判断・表現」、事後の活動では「主体的態度」の評価にそれぞれ重点を置いて実践した。

今回の改訂で、小学校、中学校ともに、特別活動の目標の中に、合意形成と意思決定が明確に分けられた形で示された。そこで、中学校においても学級活動(2)の学習過程例に基づいた指導展開で授業を計画できるよう、「重点化シート」に明確に示した。そのため、学級活動(2)の本時の活動において、生徒は、「つかむ」→「さぐる」→「見つける」→「決める」という流れを経て、個人目標の意思決定を行うことができた。このことから、この「重点化シート」が指導の改善につながったといえる。

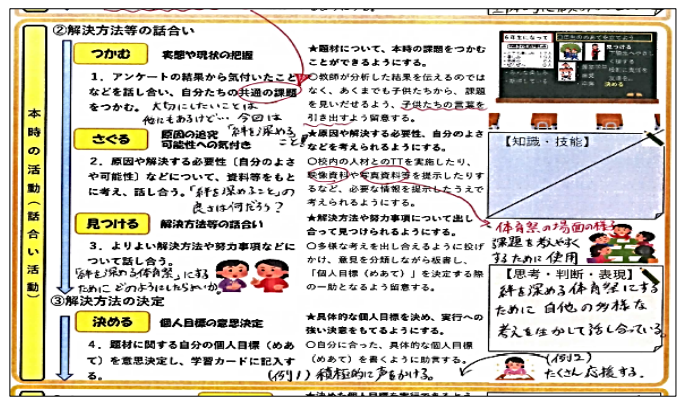


図19 B中学校検証Iの「重点化シート」活用の実際(一部抜粋)

なお、本実践の「重点化シート」では、「さぐる」場面での「知識・技能」に斜線を引いた。「参考資料(小学校)」²⁸でも例示されているように、必ずしも毎回の学級活動(2)で「知識・技能」を見取らなければならないわけではない。年間指導計画に基づいて「知識・技能」を見取る学級活動(2)も設定する必要がある。

イ 「見取りシート」の活用と指導の改善

図20は、担任がこれまでに書き込んできた「見取りシート」である。担任は、これまでに、○が付いていない生徒のうち、特に今回の学級活動で見取る生徒の名前を「重点化シート」に予め書き込んでおき、その生徒に十分満足できる活動の状況が見られた際には、書いておいた名前に印を付け、授業後に「見取りシート」に転記した。「見取りシート」に直接書き込んでいく方法も考えられるが、授業中に複数のシートが手元にあると煩雑になると判断して、「重点化シート」と「見取りシート」を関連付けながら取り組んだ。そうすることで、より効果的に生徒を見取ることができた。ただし、その際、チェックが目的とならないよう、指導に生かすことを目的とするように留意した。

観点	よりよい生活を築くための知識・技能	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度	学習態度	氏名	() 印
	問題をよまぬ、意見を整理し、少数意見も大切に受け入れ、進める意義を理解し、その方法を身に付けている。	学級や学校の生活をよりよくするための課題を捉え、課題解決に向け、多様な意見を生かして話し合っている。	含意形成したことについて、自分のよさを生かし、主体的に役割や責任を担って取り組もうとしている。			
					〇	金田優希
					〇	田中コナキ
					〇	山崎大志
					〇	山崎大志
					〇	山崎大志
					〇	山崎大志
					〇	山崎大志
					〇	山崎大志

図20 B中学校における「見取りシート」(一部抜粋)

ウ 「振り返り」と「生徒インタビュー」からみた「人間関係形成」の視点での生徒の変容

図21は、検証IIの実践後の生徒の振り返りである。人間関係形成を意識した学級目標「信じ合う心」の高まりを体育祭や合唱コンクール等の学校行事と関連付けて実感している。これを書く3日前に行ったインタビューにおいて生徒Aさんは、「12月に合唱コンが控えていて、そこは絆を深めないといけないかなって、合唱なので。私の目標は合唱コンも、すべての行事において、まとまってみんなで笑顔で2年4組を終わらしましょうっていう感じだったんですね。」と述べた。つまり、検証Iにおける、学級活動(2)「体育祭に向けて～絆を深めるために～」で立てた人間関係形成の視点での個人目標が、検証IIの学級活動(1)の実践や、その後の学校行事へもつながっている。このことから、B中学校での学級活動の取組は、支持的風土を醸成し、協働する姿、換言すると「人間関係形成」の視点での生徒の変容につながったといえる。

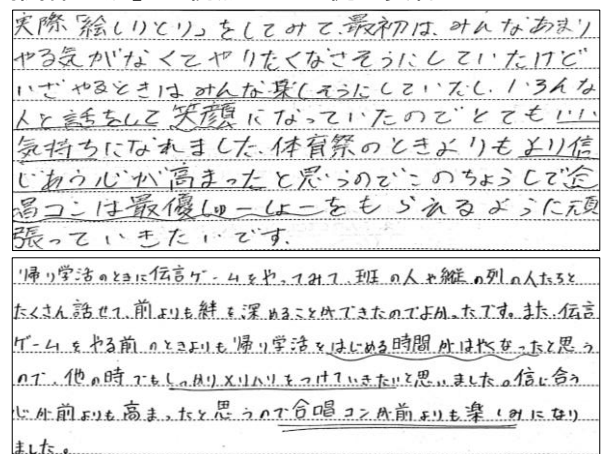


図21 B中学校生徒Aさん(上)生徒Bさん(下)の事後の振り返り

²⁸ 国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(小学校特別活動)』 東洋館出版 2020年 p.92

(3)「社会参画」に焦点化した実践【C中学校 第3学年】

①検証授業Ⅰ 学級活動(1) 議題「学級目標に近づくための企画を考え実践しよう」

「社会参画」に焦点化したC中学校の検証授業Ⅰの学級活動(1)を、図22のように行った。

図22 検証授業Ⅰ【C中学校 学級活動(1)議題「学級目標に近づくための企画を考え実践しよう」】 本時9月24日

②検証授業Ⅱ 学級活動(1)「30minレクを企画し実践しよう」

C中学校では、検証Ⅱにおいても「社会参画」の視点で学級活動(1)を、図23のように行った。

図23 検証授業Ⅱ【C中学校 学級活動(1)議題「30minレクを企画し実践しよう」】 本時11月5日 事後11月13日

③考察

ア 「一覧」及び「重点化シート」の活用と「指導の改善」

C中学校においては、目指す生徒の姿として、「よりよい学級・学校生活をつくる」といった「社会参画」の視点に焦点化したために、6月実施のプレ授業を含めて、学級活動(1)を柱に検証授業を行った。

図24は、検証Ⅰで使用した「重点化シート」の抜粋である。本時においては、話し合い活動の「思考・判

断・表現」に重点化を図っている。

学級会で担任が全体に助言をした場面は、表12のように4回あった。助言①は、多様な意見の意思表示を促す助言であり、重点化した「目指す姿」に基づく助言といえる。一方で、助言②～④は、「一覧」に基づいた多面的な助言といえる。助言②と③は、「社会参画」や「合意形成」の視点からの助言であった。助言④は、生徒の様子を即座に見取り、話し合いの方向性を修正するための助言であった。このように、「一覧」と「重点化シート」を効果的に活用して指導に当たることによって、様々な視点で話し合いの状況を見取り、フィードバックすることができたといえる。このことから、「一覧」及び「重点化シート」によって、「評価の充実と指導の改善」を図ることができたと考える。

イ 「指導の改善」による生徒の活動の変容

表13は、3回の学級会における、フロア側の生徒の発言人数と発言回数を40分あたりに換算して比較したものである。6月から9月では、発言人数に大きな差は無いが、発言回数が倍増している。9月から11月では、発言回数も増えつつ発言人数の増加が顕著であった。もちろん、回数だけが増えればよいというものではないが、少なくとも量的には生徒の学級会への参画度は向上している。次のウでも述べるが、これは質的な変容にもつながるものであり、生徒の「社会参画」の視点での変容が見えてくる。

ウ 「生徒インタビュー」からみた「社会参画」の視点での生徒の変容

表14は、C中学校の生徒へのインタビューにおける各生徒の言葉の抜粋である。みんなで決めて実践する楽しさや、よりよい学級の環境づくりにつながるという学級活動の意義に気付いていることがわかる。また、単なる参加ではなく、「参画」に変わってきていると感じているとともに、「よりよい社会」をつくっていききたいといった思いも抱いている。これは、学級活動(1)の一連の学習過程の積み重ねによるものであると考える。年間35回の学級活動の中で、児童生徒の活動の様子を適切に評価したうえで指導を行うことを積み重ねていくことによって、よりよい学級・学校生活をつくる姿、言い換えれば、「社会参画」の視点での生徒の変容につながったといえる。

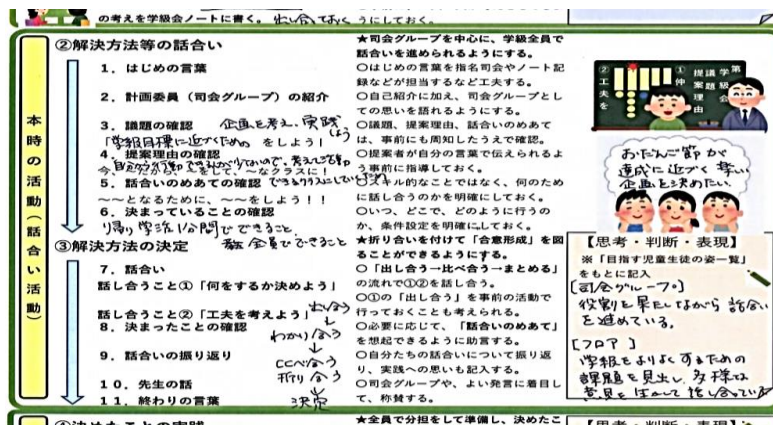


図24 C中学校検証Ⅰの「重点化シート」活用の実際（一部抜粋）

表12 C中学校検証Ⅰの学級会における教師の助言場面と内容

	時間帯	内容	助言の意図
助言①	前半	話題の偏りが見られたため、多様な意見を出すよう、他のものをよいと考えている生徒に配慮して、意思表示を促す。	多様な考えを引き出し、話し合いへの参加を促す
助言②	中盤	全員でやるのか、一部で準備するのかという基本的な約束事事項の質問に「全員でやるが大原則」であることを伝える。	全員でつくりあげるといふ参画意識を高める
助言③	後半	消去法的によいものに決めようという流れに対して、どれも仲間が考えた大切な意見であることを押さえ、よくない点を出し合っても決まらないということを伝える。	よきを生かす視点での合意形成を促す
助言④	終盤	「決まっていること」としての実施時間（帰りの会に収めればよいのか、1分なのか）についての認識のずれを修正。	共通認識へのズレの修正を行う

表13 C中学校学級会の発言人数・回数の変容

実施月	40分あたりの発言人数(人)	40分あたりの発言回数(回)
6月	11.0	20.3
9月	11.9	44.3
11月	17.8	47.4

学級の生徒数は39名

表14 C中学校の生徒インタビューで得られた言葉（一部抜粋）

C 生徒	私の意見は、取り入れることは、今回のレクではできなかったんですが、みんなで決めて、みんなで決めたことを「何か一つに向かって取り組むっていうことの楽しさ」を知ることができました。
D 生徒	学級会ってこういうことなんだっていう。意見の出し合いってだけではなくて、お互いを、お互いの意見を、分かり合えるような助け合えるような、そういう「環境づくり」をしていくうえでもすごく大切な場だと…。
E 生徒	前までは、ずっとこう、そこにいるだけで参加しているだけっていう人も多かったんですけど、「参画」みたいな感じで、意見を出してくれる人が増えすぎてよかったなって…。
F 生徒	これからは、そういうふうに、自分の意見とかを他人に伝えて、大きいくくりで言うと「よりよい社会」とかになっちゃいますけど、身近なことと言うと、行事の時にクラスを盛り上げたりとかできたらいいなと思いました。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果について

(1) 「評価の充実と指導の改善」における三つの手立ての有効性について

本研究では、「評価の充実」を視点に三つの手立てを設定し、実践を通して検証を行ってきた。特に、「評価の充実」を目指した【手立て1】の「一覧」で目指す姿を多面的にとらえ、「重点化シート」で学級活動の一連の学習過程における基本的な指導のポイントを理解し、目指す姿の重点化を図ることで、指導の際の指針となり、「指導の改善」に生かすことができた。

また、【手立て3】の「キャリア・パスポート」を、個人目標を意思決定するための手立てとして「活用」という、新たな方法で実践した点も、「指導の改善」となった。

さらには、【手立て2】の「見取りシート」によって、【手立て1】や【手立て3】による結果を含めた児童生徒のよさを記録しておくことにより、その後の更なる指導の改善に生かすことができた。

これらのことから、三つの手立てを関連付けながら活用することで、研究主題である「学級活動の一連の学習過程における評価の充実と指導の改善」につながった。

(2) 「評価の充実と指導の改善」と「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点での変容について

本研究の副主題は、「自己を生かし、協働してよりよい学級・学校生活をつくる児童生徒の育成を目指して」であった。検証授業の考察の中で述べてきたように、「学級活動の一連の学習過程における評価の充実と指導の改善」が、児童生徒の「自己実現（自己を生かし）」「人間関係形成（協働して）」「社会参画（よりよい学級・学校生活をつくる）」の視点での資質・能力の向上につながった。これは、教師が、育成を目指す姿を明確にもち、学級活動の時間はもとより、日常の学級・学校生活全体の中で、児童生徒のよさを見取り、フィードバックしていたからである。

副主題とセンター実践研究主題の関係性を鑑みると、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点で「指導と評価の一体化」を図って学級活動を実施していくことは、センター実践研究主題である「自己実現を図り、持続可能な社会を創る資質・能力」の育成にもつながるものであるということが出来る。

(3) 「実生活の自己調整」について

本研究では、「キャリア・パスポート」を活用することで「実生活の自己調整」を促すことを視点の一つとした。研究を通して、単に「キャリア・パスポート」の活用だけでなく、学級活動(1)や(2)も含めた学級活動、さらには特別活動の積み重ねの中で、図25のように、まるで「本返し縫い」をするかのごとく、

「少し前の自分を振り返り、少し先の将来を見通し、今の自分を見つめ、意思決定して実践する」といった「実生活の自己調整」ができるようになっていくことが見えてきた。このことも成果の一つである。

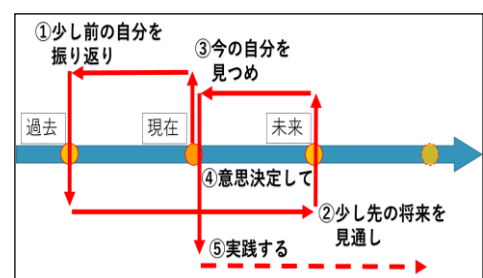


図25 「実生活の自己調整モデル」(青木作成)

2 課題について

(1) 「一覧」及び「重点化シート」の一般化とその効果や課題の検証の必要性

今回の研究は、【手立て1】としての「一覧」及び「重点化シート」を、学級活動に精通している研究員が活用したケースについて検証したものである。今後は、市立小中学校の多くの教員が活用することで、どのような効果があるのかといったことも検証する必要がある。そのためにも「一覧」及び「重点

化シート」を広く普及させ、一般化を図っていく必要があると考える。

（２）「見取りシート」の更なる検証の必要性

本研究の【手立て２】として扱った「児童生徒見取りシート」の活用方法について、Ⅱ-４の考察部分で紹介した。しかし、１年間の研究という期間的制約もあり、小学校児童（中学校生徒）指導要録の「特別活動の記録」にどのように生かしたかという点での検証はできていない。「参考資料」の例示を生かしながら、今後、「見取りシート」を指導要録の記録につなげていく方法等の研究も必要であると考え。

（３）「集団の評価」の方法を明らかにしていく必要性

今回の研究は、学級活動の評価に焦点を当てたものであった。学級活動の評価を論じる際には、「個の評価」だけでなく、「集団の評価」という視点も重要である。しかし、本研究では、「集団の評価」の方法については、具体的には言及していない。今後は、学級集団の高まりを教師がどのように見取るか、児童生徒自身が集団をどのように評価し、自分たちでその結果を生かして、どのようによりよい学級・学校生活をつくっていくのかといったことに焦点を当てた研究をしていく必要があると考える。

最後に、研究を進めるにあたり、ご支援、ご助言くださいました講師の先生、また校長先生をはじめ学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

梶田叡一『形成的な評価のために』 明治図書	1986年
杉田洋『自分を鍛え、集団を創る！特別活動の教育技術』 小学館	2013年
西岡加名恵・石井英真・田中耕治『新しい教育評価入門』 有斐閣コンパクト	2015年
国立教育政策研究所『学級・学校文化を創る特別活動 中学校編』 東京書籍	2016年
高木展郎〔編著〕『これからの時代に求められる資質・能力の育成とは』 東洋館出版社	2016年
有村久春『キーワードで学ぶ 特別活動 生徒指導・教育相談 [改訂三版]』 金子書房	2017年
安部恭子・橋谷由紀〔編著〕『みんなの学級経営 6年生』 東洋館出版社	2018年
国立教育政策研究所『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編』 文溪堂	2019年
高木展郎『評価が変わる、授業を変える』 三省堂	2019年
日本特別活動学会〔編〕『三訂 キーワードで拓く 新しい特別活動』 東洋館出版社	2019年
新富康央・須田康之・高旗浩志『生きる力を育む特別活動 個が生きる集団活動を創造する』 ミネルヴァ書房	2020年
杉田洋・稲垣孝章『特別活動で、日本の教育が変わる！』 小学館	2020年
国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』 東洋館出版社	2020年

【指導助言者】

國學院大學人間開発学部教授（元文部科学省初等中等教育局視学官）	杉田 洋
日本体育大学児童スポーツ教育学部教授（元川崎市教育委員会総務部教育改革推進担当 担当部長）	橋谷 由紀
川崎市立小学校特別活動研究会長（川崎市立稗原小学校校長）	中村 邦彦
川崎市立中学校特別活動研究部会長（川崎市立平間中学校校長）	辻 敏明
川崎市総合教育センター指導主事	高橋 徹